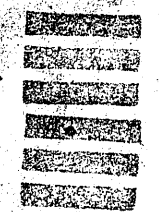


C1486
2



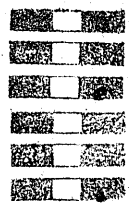
乾宮大學
附屬図書館
大川
159

大川家
159

14878

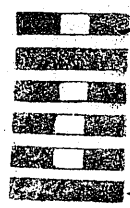
乾坤は一体にして
なり乾の裏は則ち坤とす
時と一坤お陰暗の片とす
坤お夕べとす春夏は乾に配
は坤に配す乾道行はれて
り聖人位お得て萬民其沢
の致て天下道なきは賢人
小人時お得志お極めて邪曲
奸妄お爲す





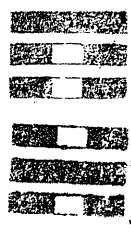
坤為地

大明窮て阴暗致り阳气潜藏——て萬物
地中より閉づ籠り發生の氣未だ生ぜず
霜お履いて堅氷將に至らんとす
時あり蓋し霜お履むとは阴始めて凝
るの象——て堅氷致るとは發生の氣
下に動きて屯おなすの機あり



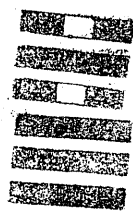
天地の間より盈つる者は唯た萬物の
故より之れお受るる屯お以ては屯とは

盈るなり物の始て生ずるなり屯と云
ふは屈んで未だ伸さるの象あり阳气
地下來復し坎水上に聚て盛なれば大
寒堅氷おなす萬物盈ち聚て地中より屈
曲し未だ伸びざるの象なり故より屯と
して亨る時は萬物悉く發生し盈ち満
て天草昧お造す



始めて生ずれば必ず蒙なり故より之お
受るる蒙お以つてす蒙とは物の維也

萬物地上より盈ち満て天草昧を造す則ち是れ蒙なり始めて生る者は智慧未だ榮せずして蒙昧幼稚の象を成す凡そ草昧の時坎水雲霧おあつて昧く艮山青草を蒙て道路お塞ぐ故に蒙朧として往く處お知らず所謂是れ蒙なり



物稚れば養はざる可らず故に之を度るに需を以てす需とは飲食の道なり

萬物幼稚なる時は以て養はざるは在るべからず乾を天より坎を雲とす雲より雨を致して以て萬國を潤し養ふ所謂是れ需なり故に需を微雨と訓ず蓋し需は是れ梅雨霖雨陰たるの時にして萬物の其養ひお得て長ずると雖も大川溢れ上りて人事通行成り難く象なり下の三陽は坎水の下るを需て大川を涉んと欲し上の三爻は貴主の渉り還るを需の象とす又萬物皆

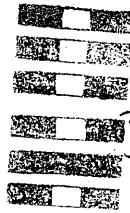
其の養を需ち求むるの意あり



天水訟

需は雲上り雨を待て——て萬物を潤すの象とす需は——て象は天晴れ地潤ふて光り亨通するよ小人奸計お以て高位高祿を貪り私慾を極めて下お難ます是れ下より上を訟やる所以なり上剛健お以て下お強ひ下陷險よ迫て訟

おあす



地水師

訟は必ず衆の起るあり故に之を受るは師を以てす師とは衆なり小なる者は訟お以て能く治む——大なる者は訟お以て治むべからず訟益盛に——て以て彼の大逆なる者お征て以て國を正くす師は夫れ凶器なり農を荒し人お殺せば民の以て悩とする所王者は已む事なく——て之を用ひ蓋し險危を用ひ以て天下お順にす此の故に天下お害すれども而も民之れは順や若

し能らざる好んで師お用ゆる者は

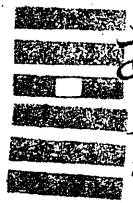
利の爲は天下お難の凶主とす



水地比

衆心ず比する彼あり故は之れは受る
よ比お以てす比とは比するあり
比は輔るなり君子前は太君の命は依
て衆お帥ひ暴を退けて邦を正くす
以て其國を安んず今其の功は因て君
子尊位を得万国を弔き諸侯お親む所
謂る是れ比はり然りと雖ども戰戰國

の後ち未だ実らず民貪く上も又未
だ富まず以て互は輔け相救はずんば
あるべからず



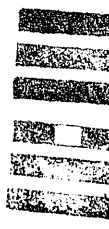
風天小畜

比すれは心ず畜ふる地あり故は之は
受るよ小畜お以てす

比は以て之は比れば之れお富する小
畜お以てす畜は貯ふなり卦中一阴お
貯ふ故に小畜と云ふなり君子は徳お
畜へ天下富く小人は物お畜へて身を

富す君子富む時は好んで禮を行ふ小

人富むと云は奢お致す



天沢履

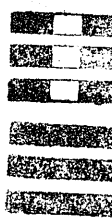
尊卑分定象
虎尾履如意

物畜へて而して後禮あり故よ之礼を
受るよ履おびつてす

小畜は密雲雨ふらざるの象にして履
は既に雨ふり既に處の象なり天晴水
地潤ひ上尊く下卑し即ち禮の所成はり
能るよ六三暗柔よして有爲の位を履
は是礼禮を亂の小人なり君子之礼を決

去らんとす六三聽ず其の志剛強よ
して終に君子を弑し天下押領して以

て自ら大君を是すものなり



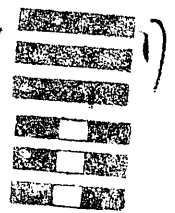
地天泰

麟角肉有象
雁衡阳至意

履で泰り而して後ち安し故に之を受
るに泰お以てす泰を通るなり

小人上り進んで君子お亡し位を奪て
自ら大君と稱す先王内にありて其事お
後の君子よ告ぐ九二は即ち後の君子
はり九二敢て其の小人を咎めず先王

の命を承尚ぶと心得て中道お行ひ
其の民を左右す所謂是れ通泰の義也



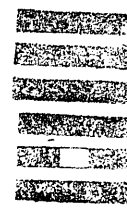
天地否

月霧裡藏之象
寒鷺春待之意

物以て通るに終るべかりす故に之をお受
るに否お以てす

小人位を得て自ら大君と成ると虽も
天下豈に其の命お用ゐんや是に於て
城廓終に破れ覆り小人羞て君子の道
將に復り起らんとす上下位お令ち内

外別お嚴くして天地閉塞の象を成す
と虽ども是を以て非に混せず邪を以
て正は難へず事理分明にして小人の
道自他塞るの時なり

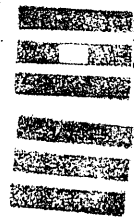


天火同人

物以て否に終る可らず故に之をお受る
に同人お以てす

天地位を定めて後日徳相親し同心相
通ずる是を同人と云ふ君子は私の情
なり万民の心お以て心とす故に其の

道廣遠より徹通せずと云ふ事なり
小人は己の心お心として人を——我
る曰ふせん事を欲するなり故に其
の道終る行はれず而も害せらるる事
ある者なり



大畜大有

人といふする者は必ず歸す故に之を受
るに大有を以てす
己を虚して人といふすれば人悉く己に歸
するなり万民の心お以て心とする時は

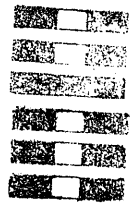


地山謙

万民則ち我に歸す所謂是れ大お有つ
てばなり能く大を有つ者は以て盈る
に全らず盈れば則ち害せらる

大を有つ者は盈つ可らず故に之をお受
るに謙お以てす
能く大お有つ者は以て盈るを欲せ
ず所謂謙と云ふは大お有つの道なる
なり是の故に君子徳あれば其の位
を踐まず功あれば徳とせず自ら輕

るして善く人より下る

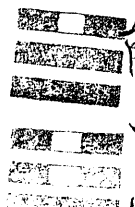


留地豫

大を有て能く謙なれば必ず豫ぶ故る之
お受るに豫お以てす

謙は下るなり豫は譽るなり君子功あ
れども徳とせず恭敬謙遜昇るに以
て牧よりす是を以て天下の人其徳を
譽めて詩を頌し歌を詠ず是れ雅樂の
由て與る所なり夫れ樂は之を神明と
す、め又以て民お和む故に風お移し

俗を變るは樂より善きはあしと云ふ
と雖も智れども樂と盛たるときは心
ず事務を怠り淫色其間に雜り起て以
て雅樂を乱し遊樂に耽るのへい死す
能くはす

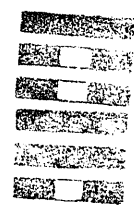


沢雷隨

豫べは必ず隨ふあり故に之を受るに
隨を以てす

喜で從ふお隨と云ふ又隨は意より隨ふ
の言ひなり君子雅樂するは素より衆

と與ふ之を樂むなり是を以て天下隨
はざるなり所謂賢者は以て其徳を
隨ひ小人は以て其樂に隨ふ

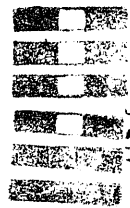


山風蠱

喜お以て人々隨ふ者は必ず事有つ故
に之を要るゝ蠱お以てす蠱は事あり
隨は從はしむるなり蠱は事を有つ也
君子の雅樂するものは衆の喜ふ所を
用て以て人を從はしむることを行ふ
なり之れ所謂事を有つなり事お有

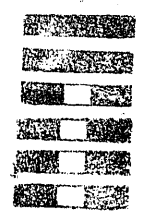
つて而して能く其の弊を飭め以て乱

を致らしめず



地沢臨

事を有つて後大なるべし故に之を受
くるに臨を以てす臨とは大なり
向ひ臨と云ふ陽氣日々進んで以て長大
お成すの象なり蠱の時事既に一變し
て父去り子進ず事おとり位に臨んで
以て父の蠱幣を幹たり所謂事を有
つて後大なるの象なり



觀山地剝

物大なりて而して後觀る——故に之を受
るに觀を以てす
仰で視るを觀る——と云ふ君子能く事
を有つ位に臨んで大なるときは下觀て
化せずと云ふことあり蓋し是れ聖人
齊戒して以て其の徳を神明にするの
象なり故に聖人神道を以て教を設けて
民服すと云ふ



火雷噬嗑

觀て而して後ち合ふ所ある——故に之に
受るに噬嗑を以てす噬とは合ふなり
小人不正の者と雖も觀て而して化す
るは以て合ふ所なくんばあるべからず
觀て而して未だ化せざる者は噬下而して
之を噬す所謂る噬嗑と云ふは刑を用て
罪あるを噬と罔愚を噬と云ふて以て
明理に合はさるるなり



山火賁

物以て苟くも合ふべからざるのみ故に

之にお受るに賁を以てす賁お以てす賁
とも飾なり

賁は文飾なり即ち人文の象なり蓋し
刑を以て噬で而して未だ合はざれば文
お加つて之れを飾る又人文を觀て以
て天下を化成するの象なり



山地剝

飾お致して然して後ち亨るれば則ち
盡く故よ之れを受くるに剝を以てす
刑を用ひて終に噬み盡さず文飾を以て

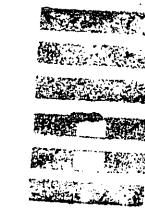
之れお合す物して後ち亨るときは沿
即ち盡すべし天地は盡ざるなり故
に沿上よ盡れを乱下よ萌す夫れ剝とは
下より剝ぎて以て其の上お隕さんと
するなり



地雷復

物以て盡くるに終るべからず剝極る
上之に反す故に之れお受くるに復お
以てす
剝は盡るなり復は反なり剝と復の用

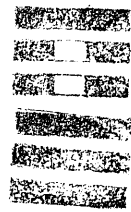
卦は月光轉復の義に象れり剝の初六
今上りに上位あり其上九今六四と
即ち是れ小人先王の虚にお侵し奪奪て
自ら國君と稱するの象なり君子位お
失て初に位に動き先王上る在て既に
其の光を失ひ君子賤位に損て及て今
光る所謂剝窮て上か下へ復へる也



天雷无妄

復は則ち妄ならず故に之れお受るに
无妄お以てす

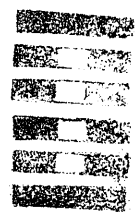
無妄は所謂天命なり天命妄なり
故に小人長ず（雷）と虽とも其位を久
みする事能（天）みず君子位を失ひ先王
居お失へども各又其の元へ復らざる（云）
ふとなく所謂是れ无妄なり



山天大畜

无妄ありて然して後ち畜ふし故に之れ
を受るに大畜お以てす
天命妄りならず物天命お保ち得て然る
後ち又畜は（天）る（山）所謂大畜は大

はる者畜はる故よ君子時お侍小人意
を失ふ



山雷頤

物畜はれて然して後ち養ふなり故に之
川お受くるに頤お以つてす頤とは養ふなり
頤も赤養ふと訓す上止り下動く頤口の象あ
り觀るべし頤口の用は言語を頤て徳を養
ひ飲食を節して身を養ふ先づ其の大物
を養つて而して後物に及すなり



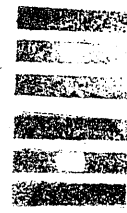
沢風大過

養わざれば則ち動くべかりし故に之
川を受くるに大過お以てす
養はるは川を以て餘りあれば又施し養
ふべし積り畜て施さば水は終に變通
すべしなり大過と云ふは大に動く也
頤の時雷大に驚し動て艮山顛り墜つ
故に今澤水溢れ上て而して以て巽木
お滅し又宮室を倒すに至る所謂大
過なり



坎爲水

物以て過るに終るべからず故に之れ
を受るに坎を以てす坎とは陷なり
大過は洪水の象にして坎は之れを治
むるの象なるべし坎お水とし満瀆と
す水其満瀆に従つて下流す所謂是
れ習坎なり



離 爲 火

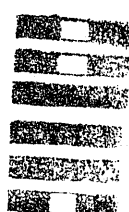
陷れば必ず麗く所あり故に之れを受
くるは麗お以てす離とは麗くなり
洪水治り地離燥き樹木再び麗り生じて

以て天下文明おなす所謂是れ離也
坎水下に流通し離火上に照明して以
て天地の徳お顯す是の故に坎離お以
て上經の終りとす



沃 山 咸

咸は心の徳ふして性の動ふ所なり性
の物に咸ずるお情と云ふ咸は與とす
るを應と云ふ今感と言ふは咸と云
は是れ心の徳は人道の元めなるお以
てなり小男小女お下り小女男は從ふ

は夫婦の始めにして入道の元めなり
 雷風恒


夫婦の道は以て久からざるべかりず
故に之を受くるに恒を以てす恒とは
久しきなり

男女交感一で夫婦道循るは咸の象也
恒は夫婦の道久やして父子の道循り
長男長女各々父母に代て事お攝るの
象なるヤ

 天山遯

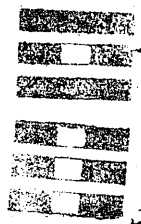
物以て久しく其所に居るべかりず故
に之れお受くるに遯を以てす遯と
は退くなり

功成り名遂げて身退くは遯と云ふ
退て以て其徳を高くす陽は上に退き
陰は下に退く然して又陽上に退そげ
ば陰貞尾に即て上り進まんとするの
象なり

 雷天大壯
物以て遯に終るべかりず故に之れを

受るゝ大壯を以てす

父徳を高くして退ぐは子父の徳
光を得て進んで以て盛大をなす是れ
を大壯と云ふ物極めて大なれば必ず
止る雷天上に動は則ち盛大の極也



火地晋

物以て壯に終るべからず故に之れを受
くるに晋を以てす晋とは進むなり
大壯にして止らず尚ほ進むを晋と云ふ
即ち晝の日万国を照すの象なり日中

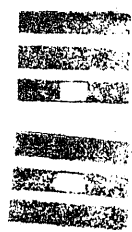
傷らる



地火明夷

進めば必ず傷らる所あり故に之れを
受くるに明夷を以てす夷とは傷らる
なり

晝日極めて夜陰致り大明の後大は暗し
小人時を得て進み君子退て光は暗す
直正者チキは邪曲なる者より謹められ且つ
害せらる是れ即ち明夷なり



風火家人

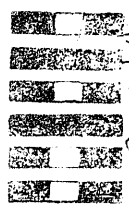
外に傷むる者は一は必ず家より及へる
故より之れお受るに家人を以てす
奸佞邪悪のもの時を得て擧げ用られ
賢哲皆は退けらる是の故に君子王朝
に事へず家に歸て自ら偏お正くす所
謂る是れ家人あり



火沢睽

家道窮すれば必ず睽く故より之れお受
くるは睽お以てす睽くは乖くなり

一家の道既に成れば兄弟當に分離
せざれば用を成すべからず火は上り
沢は下る二女同居すれば其志相得ざ
るなり故より火は以て上り歸せしめ沢
は以て下に歸るむする所を得れば
同くして異なるの象を觀るべきなり
素より同くする者は必ず用を成す



水山蹇

乖は必ず有難故受之以蹇蹇者難也
兄弟乖て家お出づる者は先づ行くに

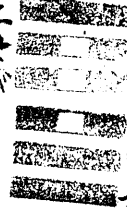
難んで止まることあり故に蹇を跋と
訓ず又蹇は偃蹇の義とす九五は暴悪
の王なり大に偃蹇して以て天下の難と
をなす



雷水解

物不可以終難故受之以解解者緩也

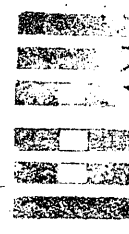
蹇は嚴寒の象にして解は春暖の時なり
蹇は險中より止まり解は險を出て動く



山沢損

緩必ず有所失故受之以損

損は山沢氣を通ぜず大に山林お破損
するの象なり將に今沢水を酌み取て
以て山村お育んとす下お損して上を
益すれば其道日々に上行する者あり

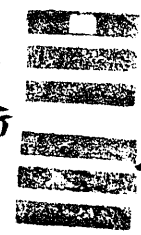


風雷益

損而不已必益故受之以益

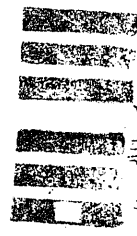
損すれば必ず衰ふ益すれば必ず盛なり
損して已むは君道に非ず益とは上お損
して下お恵むが故に民の説ぶこと限り
なし天徳お施すは地由りて益せ

ざる所はしすに風を以て——地物お生ずるは雷お以てす益は天施——地生



沢天夬

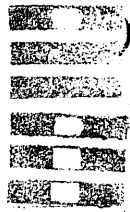
益而不已必決故受之以夬夬者決也
夬は決断の義なり群陽共に議て一陰を
決断す剛健に——説くは決断する所以也
廣く養ひ衆を惠て罪あるを揚げ法を示
——罰を明にするの象なり



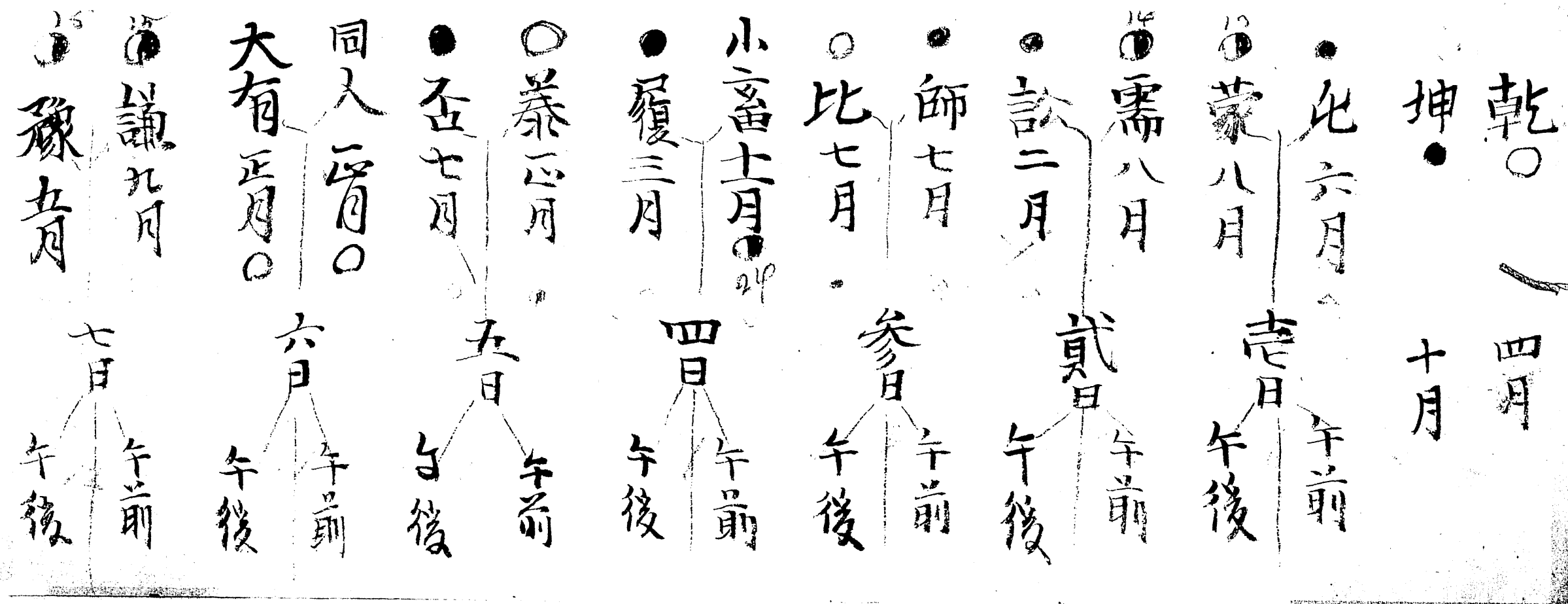
天風姤

決心有所遇故受之以姤姤者遇也

事を決断して是非を辨辨ふれば理に
於て遇ふ所なくんばあるべからず故は君
子は其の罪を決すれども其人お捨てず
心ず復用ゆる所あつて其宜——きは遇は
しむるなり又姤は好に同トきたり初六
は女の美好なる者とす女に——て牡お好
用り故に女お娶に用ゆる勿れと云や



物相遇而後聚故受之以萃萃者聚也



插入紙片

● 隨七月

八日

午前

● 蠱正月

午後

● 臨十一月

九日

午前

● 觀八月

午後

● 噬嗑九月

拾日

午前

● 賁十一月

午後

● 剝九月

拾日

午前

● 復十一月

午後

● 无妄二月

拾二日

午前

● 大畜十一月

午後

● 頤八月

拾三日

午前

● 大過三月

午後

● 坎十月

○ 二十

● 二十

● 離四月

● 二十

合方十四也

● 咸正月

拾四日

午前

● 恒正月

午後

● 遯六月

拾五日

午前

● 大壯二月

午後

● 晉二月

拾六日

午前

插入紙片

● 商 閏

● 三十日

○ 威 正月

合方十四也

○ 恒 正月

拾四日

午後

● 遯 六月

拾五日

午前

○ 大 壯 二月

午後

● 晉 二月

拾六日

午前

○ 明 夷 八月

午後

○ 家人 六月

拾七日

午前

● 睽 二月

午後

● 蹇 八月

拾八日

午前

○ 解 十二月

午後

○ 損 七月

拾九日

午前

○ 益 七月

午後

○ 夬 三月

拾十日

午前

○ 姤 五月

午後

○ 萃 六月

拾十一日

午前

○ 夬 八月

午後

● 困 九月

拾十二日

午前

○ 井 三月

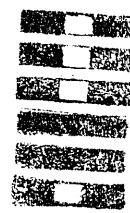
午後

插入紙片

未濟主月 廿七日 午後	既濟正月 廿八日 午前	小過二月 廿九日 午後	中孚八月 三十日 午前	節拾月 廿八日 午後	渙三月 廿九日 午前	兌拾月 廿九日 午後	巽四月 三十日 午前	旅五月 廿六日 午後	豐九月 廿六日 午前	歸妹七月 廿五日 午後	漸正月 廿五日 午前	艮四月 廿五日 午後	震拾月 廿五日 午前	鼎拾二月 廿三日 午後	革三月 廿三日 午前
-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	------------------

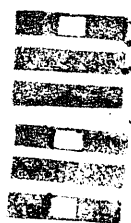
插入紙片

萃は聚るなり万物類お以て同く其の
方に聚る今沢水地よ上る則ち潤濕相
聚り草木萃生するの象なり



地風井

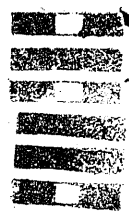
聚而上者謂之升故受之以升升而不取曰
小お積で高大お致すを升と云ふ漸く
にして上て而も息まざるの象なり又
地中に木お生ずるの象とす



沢水困

升而不已必困故受之以困

升て而も止まず望を遂て又望を益し志満
て足らぬと知るれば是れ人情の常として
終に困窮する所以なり困は君子虚邑よ
居りて未だ井泉お得ざるに年大よ旱し
沢中に水なし且つ衣食にも乏しくして民困
窮するの象とす



水風井

困乎上者必反下故受之以井

井は井咎なり後世地お堀て水を取るの
井と曰ふからず古は王侯國を建るに必ず

井泉あるの地を撰て事を始む夫れ井は
養て極まらず下に居て上に通ず今君子
虚邑に居て大旱に困窮する時は廣野を望
めば木上より水氣あるの所を見即ち是れ
其地必ず井泉あるの象として終る其の
廢井お興して王道お開く故に是れ井お
井と名づくるなり

䷧ 澤火革

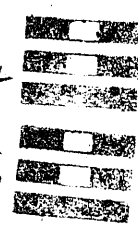
井道不可不革故受之以革
革は變革の義なり火能く濕を燥

水能く燥お息む燥お變ずれば潤沢お
成りて濕を變ずれば文お成り皆旧を
去るの象とす井道成て寒泉常に食や
べり沆沔既に息み困窮解け通して明
潤光沢日々新たなるの時なり

䷲ 火風鼎

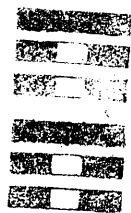
革物者莫若鼎故受之以鼎
鼎は烹飪の器なり故に善く物を革む
聖人烹て以て上帝を祭る蓋し王者命を
革むれば大祭して自ら鼎を捧ぐ故に

鼎は天下第一の祭器なり



震爲雷

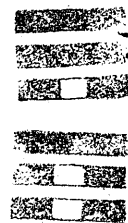
主器者莫若長子故受之以震震動也
震は長男なり大器を託け神の事として
家お續くことは長子たる者の当然也
初九は君子なり鼎を捧げて神より享し
敬お盡す其動作恂慄威儀ありて民
自ら恐懼す恐て以て福を致すは則ち
震の亨るなり



艮爲山

物以て動きに終るべからず動げば必ず之を
止む故に之れを象るは艮お以つてす

艮は安靜止息して通ぜず交らず萬物各其
の所に止まれり其の徳お土——其象お山とす
萬物悉く土より出で土に入る故に艮は物の終始
お主でる

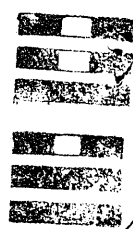


風山漸

物以て止るに終るべからず故に之を象るは漸を
以てす漸とは進むあり

漸は山上に木の生ずるの象なり萬物土より入て止

まり時を得ては玉を得て進む良止安息の後
往く進み動く具進むと必ず順序あり故に
漸く名づく

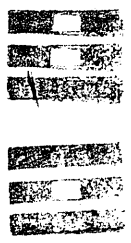


雷沢歸妹

進めば必ず歸する処あり故に之れお受るる歸
妹お以てす

妹は小女なり今小女行きて長男は歸く故に之
れを歸妹と云ふ進んで歸く所を得るの貌とす
又帝の姫下つて臣下は歸く故に天地の大義あり
と云ふ星辰皆陰お上より陽お下より即天地交
通の象あり

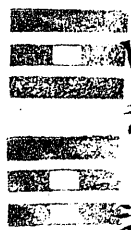
の



雷火豊

其の歸する所を得る者は必ず大はり故に之
を受るに豊お以てす

歸する所を得て而も止まらず尚成大お致す雷
雨解き動いて萬物既小榮興一雷雨相合て萬物大
に成る故に名けて豊と云ふ凡物中お得れば則ち足る
中を過れば即ち盈つ今豊は則ち其盈つる也



火山旅

大を極むれば必ず其居を失ふ故に之を受る
る旅お以てす

歸する所を得て尚盛大お極むれむ居お失て旅
客とはる所^謂以なり火行て山林を焼き鳥其の
巢お焼くの象とす

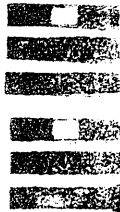


巽 爲風

旅して容る、所は——故ま之れお受るよ巽を以
てす巽とは入る、あり

旅して容られず下て以て人よ入る下よ入るを巽と
云ふ入て以て意よ順ふ其の象お風——其徳お
木とす按ずるに忠臣其君お諫してする者は
先づ君の意よ從て其腹心よ入り
腹心よ入て

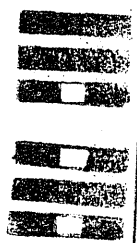
之を誘説するに非らずれば容れられざるあり



兌 爲沢

入て而して後ち之れお説く故ま之れお受るに兌
お以てす兌とは説あり

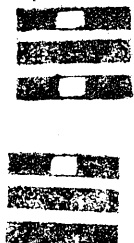
兌は泰に同下則ち通るなり説は説言通釋の
義なり(古人悦と訓ずるは蓋し謬れり)君子は天
に順て其説お起——人よ應トて以て其教お
説く故ま説いて民よ先先てば民其言お忘れ説
て難きお犯すときは民其死よ忘る故ま説の大
ある民勸哉と云へり



風水渙

説て而て後之を散ず故之を受るに渙を以てす渙とは離るなり

説言明解を得て條理新たあるの時あり是は水の溜滞するの象よりして渙は水の流離渙散するの象なり

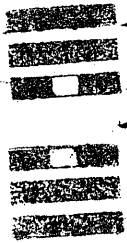


水洊節

物以て離る終るべからず故之を受るに節を以てするなり

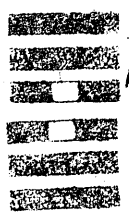
節は廢なり流離して止まらず之を節するに廢

を以てす今侯上る水あり澤は能く水を保つ也



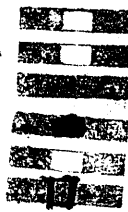

風沢中孚

節して之れを保ず故之を受るに中孚を以てす孚は化なり剛が中より能く民を化す故之を中孚と云ふ節を行つて道に當れば民信せずと云ふは能く其の言を保ずる者は終る以て其徳を化すなり此卦は口信あり卦象虚一今きふお揚げてふさはたぬ




是レ男女密訟ノ卦文ニ口ト口ト合フ色欲ヲホシイママ

ニスルノ卦象又鳥が卵ヲ抱キ居ルノ象アリ中ニ陰ハ卵

ノ象又伏卦ニ  小過アリ小過ハ鳥ノ兩翼ヲ廣ゲ
タルノ卦象  二陰ハ羽中ニ陽ハ鳥ノ身下ニ陰ハ羽ナリ故ニ
中ニ鳥ノ形ヲ抱キタル形象アリ

 雷山小過

其の信ずるものあれば必ず之を行ふ故ニ之を
受るに小過おほつてす

過は行く也小人上行  過ぎと号る故ニ之を小
過と云ふ又人の言を信じて以て行ふ者は少く過
失ある也此故ニ君子行ひは恭ニ過ぎ喪は哀ニ過ぎ
事は險ニ過ぐ口傳ニ新ハ人ニ告ラ残して脱走スルニ象アリ

 水火既濟

物過ぐる事有れば必ず濟る故ニ之を受るに既
濟おほつてす

坎水外より行き離火内より来る水氣既ニ濟つて天陰
火氣既ニ濟つて地燥く以つて密雲雨を降らす
の象を成す陽は有爲より陰は無爲に付
く内外既に濟り極まりて六位既ニ定まり變

易の理茲ニ盡きたり

 火水未濟

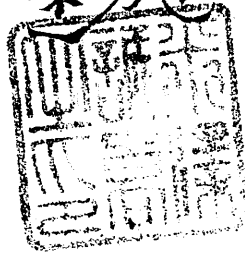
物窮まるやかりず故ニ之れを受るに未濟おほ

て終る

火は上て天よ天よ歸一水は下りて地よ歸すは
則ち萬物の終なり物窮るべからず故よ物
の終りは即ち物の始めなり離火上に在て坎水お
照す火盛にして水汽るときは則ち雲して
乾となるべきなり而して乾坎坤艮此ト始
よ返へる順序なるに序卦と云ひ見つた
いお傳と云ふなり 全終

明治四年四月廿日

下野佐野町三一貳番地
米沢誠士書講求



◎

初爻ノ動ニヨリテハ住居安カラザル
意マリ何カ企ツル意マリ一步踏ミ出
ス意マリトシ女ノ爲ニ動ク意マリ無
益ノ事ニ苦シム意マリ人ニ隔ラルハ

◎

意マリ以上初爻ノ動ニ從テ判ス
式爻ノ動キニヨリテハ彼レ此レト心
ヲ配ル意マリ又心支ヒノ意マリ獨立
テラザル意マリ心落着カザル意マリ
何事モ目上ニ任セルノ意マリ

◎

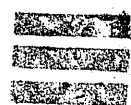
三爻ノ動キ心バカリ進ム意マリ驕リ

ノ出ル意アリ男女ノ關係アリ自今迄
人ノ身トナル意アリ思フ外へ出デ
タルノ意アリ望ミノ事ハ時ノ意アリ

四又ノ勤ギ離レ際ノ意アリ住居安カ
ラザル意アリ謀リテ破レタルノ意アリ
リ危キ意アリ證文等ニ關係スル意アリ
リ何事モ中ダルミノ意アリ
五又ノ勤キ目上ノ人ニ引立ラルノ
意アリ眞正ノ人ハ立身出立スル事有
リ物事大抵成就スルノ報ナレドモ成

張ルハ忽チ破レアリ家業ヲ改メ又
ヘントスル意アリ思案定ラザル意
アリ病人危シ
六又ノ勤キ後悔スルノ意アリ了簡達
ヒノ意アリ思案ニ迫ル意アリ物ヲ一
括リニスルノ意アリ我レ一人ニテ專決
スルノ意アリ
以上ハ又ノ勤キニ依リテ右判ス他シ
是レ等ニ計リ泥ヒテ判断アヤマル
勿レ易ハ活物古又活用ヲ貴ブ
● 彼我ノ情状ヲ察スルノ活法

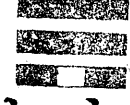
頑^{ガシ}



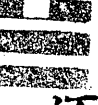
彼健強ニ屈セズ



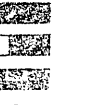
頑固ニメ動カズ



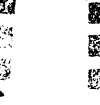
頻リニ他ニ説ク物



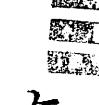
喜ンデ外諺ヲ入レル



優柔不斷他ニ背ク



心白クモ人ヲ避ク



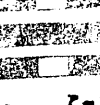
明ニ過ギテ決セズ



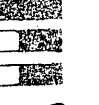
一諾一背常ナシ



愚ニメ客レズ



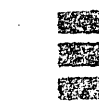
貞古ニシテ容レズ



我難シテ他ヲ謝絶ス



他ヲ難シテ容レズ



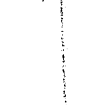
愚勇ニ行ク他ニ求ル



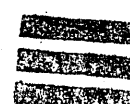
用襟他人ヲ迎ニ容ル



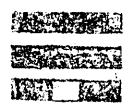
不得要領瓢箪的



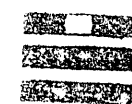
勉メテ人言ヲ容



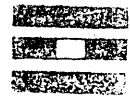
我固ク自説ヲ守ル



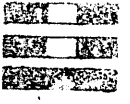
頑強ニメ屈セズ



背白テ他ヲ厭フ



不斷ニメ決セズ



勉テ他ニ説ク者



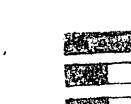
悦ンテ人言ヲ容ル



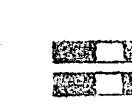
明察ニメ容レズ



八方美人ノ虚諾



勇ニ進ニテ他ニ求ル



勇ニ進テ他ヲ容ル



難ク為ニ外諺謝絶



他ヲ難シテ容ズ



愚頑以テ墨守ス



求メズ又從ワズ



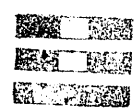
要領ヲ得ズ瓢箪的



強イテ他ニ從フ

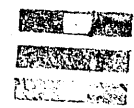
八卦取象

震



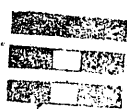
坤艸ニ乾來リテ下ニ入リ、動クノ象

坎



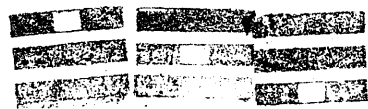
坤艸ニ乾來リテ中ニ落テ入ルノ象

艮



坤艸ニ乾來リテ上ニ止マルノ象

離 巽



乾艸ニ坤來リテ下ニ伏スルノ象

「ニ」ニ坤來リテ中ニ付クノ象
「ハ」ハテ上ニアリテ喜ブノ象



乾ヲ肺臟トシ上衝トシ、實滿トシ、腫脹

トシ、陰虛トシ、上卦ニ在ッテハ、積氣心

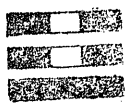
胎ヲ塞グトシ、下卦ニ在テハ、少腹滿ツ



坤ヲ脾臟トシ、虛耗トシ、肉脱トシ、陽虛

トシ、上卦ニ在テハ、心氣ノ不足トシ、下

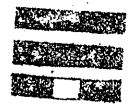
卦ニ在テハ、腎虛トス、下利トス



震ヲ肝臟トシ、動トシ、上ルトシ、怒リ驚

クトシ、吐トシ、下卦ニ在ッテハ、臍停ノ

以ハ卦配臟腑、以卦象配病症



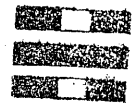
動トシ症疝積トシ脚氣トス

巽ヲ膽臟トシ鬱熱トシ積氣上逆トシ

病ヒ往來アリトシ惑疾トシ上卦有テ

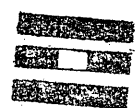
ハ心胸痞塞ストシ奔豚氣トス下卦在

テハ疝トス濕熱トス腫物トス



腎臟トシ寒トシ水氣牽痛トシ血トシ

塊トシ上卦ニ在テハ留トシ飲トス

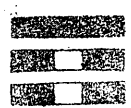


離ヲ心臓トシ熱トシ火トシ上逆トシ

上卦ニ在テハ疝熱止心熱肺ヲ克スト

シ肺癰トシ下卦ニ在テハ疝熱トシ少

腹熱痛トシ腸癰ノ類トシ大便燥結ト



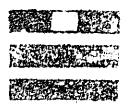
艮ヲ胃腑トス虛弱トシ毒ヲ止ムトシ

積氣背ニ聚ルトス氣血不順トシ上卦

ニ在テハ不食トシ下卦ニ在テハ下部

ノ衰エトシ泄瀉トシ病毒中腕腕ニ止

衰



兌ヲ肺ノ屬トシ瘵瘵瘵トシ瘵血トシ

濕毒トシ上卦ニ在テハ口舌ノ病トシ

心胸痞滿トシ下卦ニ在テハ血不順ト

シ小便澁ルト腫ル、トス疳癰便毒
ノ類膿アル腫物トス大便カクトス

以上八卦象意ノ大畧ヲ擧ゲテ占事ニ
從テ取リ用エベシ是レ易孝階梯ト名
シテ占事ノ肝用ノ象義ヲ示ハ右者ノ
意ニ從テ廣ク取リ用エベシ

眞勢流

明治四十二年

四月廿三日

不沃誅言清未

米澤